

難役「孫右衛門」

吉田玉市

〈出典：「幕間」第五卷第十一号、昭和25年11月〉

私の師匠の玉次郎さんは、先代栄三師匠の治兵衛に対して永いこと孫右衛門を付合っておられました、実に立派なものでありました。その後も孫右衛門を遣った人はありますが、私はそれについて少しも覚えておりません。

師匠の孫右衛門では足も遣い左も遣いましたが、私の本役として遣わしてもらうのは今度で二度目であります。しかしこれが師匠の型だったといい切れる自信はまだどこにもありません。これで山城さんが語っておられましたら、どうにもこうにもならなかったのではないかと、空恐しくなっております。せめて四興行、八十日ほども遣わしてもらいましたら、師匠の型らしいものをお見せすることが出来るかも知れません。

羽織袴に、頭巾で頭を包んだ侍姿の孫右衛門が、町人の地をみせるところは「さだめて金づく」の後の「五両十両」のところではありますが、左掌を右の扇子で二三度指す科を世話にくだけてみせますのを、サアここは世話になるのだという意識を持っているようではどうにもなりません。後の「最前は侍冥利」と膝に手をおいてから「今は粉屋の孫右衛門あきない商売冥利」と軽く袖口に手を入れて揃えて出して、前かがみに膝を進めるところも同じ呼吸であります。

治兵衛が格子越しの狼藉があって、小春が奥へと促され、治兵衛の脇差だと知って思わず「治兵衛さん」と口走りますところ、孫右衛門が「なにがなんと」と町人に戻って少々あわてた様さまは師匠がなんともいえないよい味を出しておられました。

善六、太兵衛が立去った後で「頭巾をとり」は町人で語られますが、ここから孫右衛門はすっかり町人にならねばなりません、前の侍のあいだは兎も角、この町人となった後が私ではどうも手も足も出ません。

意見になってからのかしの遣い方は非常に難かしくなります。「此亭主に工面して」のクリ方がどうにか出来た日はホッとします。小春の本心を知って「それに心中して死なうとはまいかい阿呆ではあるわい」の顎の突出した工合、すべて阿呆にならない心懸けが大切であります。

「祭の練衆か気違ひか、終ひに差さぬ大小ぼつ込み、蔵屋敷の役人と合歌舞伎役者の真似をして」は一つの仕どころであります、人によっては左手に大小をもって、右の扇をひらいてチーン、チーン、チンチンチン…の合の手について、足拍子を入れてあおぐ振りをされますが、これでは余りにも身振り本位になりますので、絃について膝まで動かすのをよして、扇で軽く一二度あおいで文句一杯に、右に扇の手をひらいて極るのが師匠の型で、「すてどころがないわい」で左前に大小を投出し、扇も前に捨てています。

段切りで、治兵衛が孫右衛門の羽織を着て、頭巾を冠り、ふてくされた心で懐手をし、絃にノッて表口で行きつ戻りつするところは人形独特の振りではありますが、治兵衛を

下手へ引戻して、袴をくくりつけた大小で止めるのが「別れて」の析頭になっていますのは今度だけの異例で、引戻す、又進もうとするのを止めて、床の浄るりと同じイキで大小を肩に担ぐのが、析頭になるのが本格であります。